

1970 年代前後の建築批評にみられる「都市理念」の展開過程に関する研究

- 「都市」を記述する際の観念論/実体論的側面に着目して -

Research on the development process of "Urban idea" seen in architectural criticism around 1970's

—Focusing on Idealism / Substantialism when describing "Urban"—

○吉村凌¹ 田所辰之助²*Ryo Yoshimura¹, Shinnosuke Tadokoro²

This research aims at the architectural thought in the Japanese architectural world around the 1970s. It aims to clarify thought that goes through the target age when paying attention to the "Urban idea" of architects and architectural critics. It can be confirmed that there are two genealogies, <Idealism genealogy> and <Substantialism genealogy> in the "city philosophy" seen in the period around the 1970s. From the four items of <theory> <method> <element> <space>, it can be confirmed that each architect and architectural critic is balancing by crossing the items. < Substantialism genealogy > can confirm the difference with the European architectural trend. It is Japan's unique thought and it is influenced by Society for Urban design research.

1. 研究背景と目的

これまでの通説において1970年代前後の時期は、近代建築の確立からそれ以後の潮流への転換期とされている。歴史的過程の中では、「都市」を媒介にすることで建築家達が様々に建築理論を提唱した。先行研究[1]をはじめ、歴史的過程の中での「都市」とは、海外潮流の導入、批評論壇上で隆盛した建築理論や用語、建築作品にみられる傾向との関係の中で、建築の再定義を図るための戦略的用語と見なされている。しかし、対象年代において都市空間との関係を記述する際に使用された用語[2]は、年代・建築理論間を横断し、且つ現代においても使用されている。よって本研究は1970年代前後を中心とした、建築家、批評家の「都市理念」[3]に着目した際に対象年代を徹底する思想を明らかにすることを目的としている。

※【 】内の表記は、[Table 1]の表記と対応している。例) Current I : 【I】、[B] : 手法論にみられる概念としての都市 : 【B】

2. 研究対象と方法

都市デザイン研究体の取り組み[4]が紹介される61年から、「ポスト・モダニズムの建築言語」が邦訳で紹介[5]され、近代以後の潮流を志向する議論が批評論壇上で隆盛する79年前後を対象期間とする。建築系雑誌に掲載された建築家・批評家の「都市理念」が垣間見られる文献を対象とする。析出された「都市理念」を体系図[Table 1]を用いて分析を行う。〈理論〉〈方法〉〈要素〉〈空間〉の4つの項目に区分する。[6]項目間の関係性、比較検証として【I】【IV】の「都市理念」との相違・類似点を明確にし、日本建築界に通底する思想の一端を明らかにする。

3. 日本建築界における「都市理念」の展開

日本建築界における建築家・批評家の「都市理念」の展開には、【A】、【B】、【C】、【D】、【E】の5段階での変遷があることが確認できた。各段階では建築家それぞれが〈理論〉〈方法〉〈要素〉〈空間〉の各項目間の中で均整が取られ、都市空間と関係が記述されていた。〈理論〉〈方法〉は、【I】の影響、【II】と対応し合うことで展開されている。【III】にみられる「都市理念」は、都市空間を構成する「形式」に着眼し、「歴史/文化」と

の関係の中に建築を位置付けていた。[7]〈要素〉〈空間〉は、比較から確認できる通り、日本独自の展開であることが確認できる。

4. まとめ

本稿では、1970年代前後の時期の建築潮流を「都市理念」に着目することで、現状では以下のことを明らかにすることができた。70年代前後の時期にみられる「都市理念」には〈観念論的系譜〉と〈実体論的系譜〉の2つの系譜があることが確認できる。〈理論〉〈方法〉〈要素〉〈空間〉の4項目間からは、それぞれの建築家・批評家が項目間を横断することで均整が取られていることが確認できる。通説において都市と建築は、海外潮流の導入をはじめとする批評論壇上で隆盛した建築理論や用語、建築作品にみられる傾向との関係の中で定義されていた。[2]〈観念論的系譜〉は、【I】の影響を受けながら、【II】と対応し合うことで展開されている。〈実体論的系譜〉は、【IV】との相違点を確認することができるため、日本独自での展開と考えられる。対象年代においては、主に都市デザイン研究体の思想が継承されていることが確認できる。

5. 参考文献および注釈

[1]布野修司は著書『戦後建築の終焉-世紀末建築論ノート』(れんが書房新社、1995年)で、70年代で展開される、地域・空間・環境・保存に着眼する諸傾向を、社会状況に伴う60年代への反動と論じることで60年代と70年代とを区分した。

[2]対象年代においては、都市空間との関係を記述する際に「界限」「広がり」等の用語が使用されている。

[3]本稿では、対象年代に通説として扱われている潮流・論壇の区分に関わらず、建築家・建築批評家による都市空間との関係を記述する際にみられる思想を「都市理念」と称し分析を行っている。

[4]都市デザイン研究体は、伊藤ていじ、磯崎新、東京大学丹下健三研究室、同大学高山英華研究室を中心に構成され、明治以前の日本の都市空間にみられる構成要素に着眼し調査活動を行なった。雑誌『建築文化』(彰国社)で、「日本の都市デザイン」(1961年11月号)、「日本の都市空間」(1963年1月号)、「日本の広場」(1971年3月号)と3度に渡って特集されている。

[5]C・A・ジェンクス著、竹山実訳「ポスト・モダニズムの建築言語」『a+u』新建築社、1979年増刊号

[6]先行研究での問題点は、転換期とされる歴史的過程の中で提唱された様々な建築理論を、近代以後の潮流と総称することで、変遷過程に関する定義が明確にされていないであった。本稿では4つの項目を、〈理論〉:概念を元にした空間表現、〈方法〉:理論の方法化、〈要素〉:都市空間にみられる実体をつくり出す構成要素、〈空間〉:都市にみられる実体を元にした空間表現、と定義をすることで、【I】【IV】、【II】、【V】との均整関係を分析していく。

[7]A.ロッシ、O.M.ウンガース、C.ロウをはじめとする、欧州建築界では、都市の「形式性」に着眼し都市と建築との物理的な対応関係を記述した。

